



 Data	2022-141
監督: 瀬々敬久	
脚本: 林民夫	
企画プロデュース: 平野隆	
原作: 辺見じゅん『収容所(ラーゲリ)から来た遺書』	
出演: 二宮和也/北川景子/松坂桃李/中島健人/寺尾聰/桐谷健太/安田顕/市毛良枝	

みどころ

2022年2月24日に始まった、ウクライナに対するロシアの軍事侵攻が長期化する中、ロシアの残忍性が明らかに！それは、終戦直前に満州・ハルビンに攻め込み、50万人の日本人捕虜をラーゲリに収容した時と同じだ。“平和ボケ”に慣れてしまった今こそ、本作でそんな歴史をしっかりと！

劇団四季のミュージカル『異国の丘』は、スリリングなストーリー展開と共に“あの名曲”が涙を誘ったが、本作では、主人公の遺書全文の口述シーンを心ゆくまで味わい、かつ涙したい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ラーゲリとは？シベリア抑留とは？山本幡男とは？■□■

本作のタイトルになっている“ラーゲリ”って一体ナニ？今時の若者はそう思うはずだが、私たち団塊世代なら当然、それが旧ソ連の収容所だということを知っている。『ラーゲリより愛を込めて』というタイトルと、チラシに映っている山本幡男（二宮和也）とその妻、山本モジミ（北川景子）の姿を見れば、まさに本作は太平洋戦争終結直前の1945年8月8日に日本に宣戦布告して満州や朝鮮北部などへの侵攻をはじめ、8月15日の玉音放送後もなお侵攻を続けた挙句、8月23日にスターリンが「日本軍捕虜50万人をシベリアに移送せよ。」と命令したことによって始まった、「シベリア抑留」の悲劇を描いた映画だということがわかる。

他方、本作の主人公になっている山本幡男とは一体だれ？それはウィキペディアにも載っているし、本作のパンフレットにも詳しく紹介されているので、本作の鑑賞を機にしっかり勉強したい。ウィキペディアによると、彼は「旧制東京外国語学校（後の東京外国語大学）でロシア語を学んだが、在学中に社会主義に没頭して左翼運動に参加していたことから、1928年の三・一五事件の際に逮捕され退学処分となった」そうだ。本作はそんな

な点にまったく触れていないが、本作冒頭に登場する、4人の子供たちと共に夫婦で友人の結婚式に列席している山本の幸せそうな姿を見ると、彼はきっと“転向”したのだろう。なぜかというと、彼は1936年に満州に渡り、南満州鉄道内の調査機関である大連市の満鉄調査部に入社したというのだから。ちなみに、彼の入社時の成績は、ロシア人の試験官が舌を巻くほどだったそうだが、捕虜とされた後、彼のロシア語はどう活用されたの？

多種多様な人物を登場させた山本薩男監督の『戦争と人間』三部作（70年、71年、73年）（『シネマ5』173頁）では、吉永小百合演じる五代家の令嬢の恋人として、山本圭演じる左翼学生が大きな役割を担っていたが、本作では山本幡男の学生時代の左翼活動はノーコメント。まずは、冒頭に見る一家の支柱として、家族の命を守ろうとする彼の姿に注目！

■原作と辺見じゅんに注目！山本幡男の遺書に注目！■

瀬々敬久監督は本作のタイトルを『ラーゲリより愛を込めて』と、いかにも今風(?)にしたが、原作になったのは、辺見じゅん氏の『収容所（ラーゲリ）から来た遺書』だ。彼女は『男たちの大和』の著書としても知られているが、その原作を映画化した『男たちの大和 YAMATO』（05年）は「戦後60年」を記念して2005年に公開された素晴らしい問題提起作だった（『シネマ9』24頁）。1939年生まれの彼女にとって、あの戦争とどう向き合いかは、執筆活動の励みになっていったはずだが、彼女は1986年に山本幡男の遺書と巡り会ったことによって、1989年に『収容所（ラーゲリ）から来た遺書』を書いたらしい。

パンフレットには、山本幡男の遺書との出会いについて、「その遺書を、編者として読んだ時の感動は今なお鮮烈である。ことに子供達に宛てられた遺書を目にしたとき、これこそが私たち日本人に向けられた力強いメッセージではなからうか、とさえ思った。」と、書かれている。本作のパンフレットには「山本幡男の遺書全文」が掲載されているので、それは必読！ちなみに、去る12月17日の新聞各紙は一面で閣議決定された①「国家安全保障戦略」②「国家防衛戦略」③「防衛力整備計画」という「安保三文書」の改定を報じた。新聞にはその三文書ともそれぞれ膨大なものであるため、その要旨のみが掲載されていた。しかし、それだけではダメ。当然、私はその改定文書の全文を読んだが、それと同じくらいの熱意を持って、山本幡男の遺書全文を読んでもらいたい。

■『異国の丘』VS 本作、九重秀隆 VS 山本幡男■

「戦後60年」を記念して公開された『男たちの大和 YAMATO』と同じように(?)、「創立60周年」を迎えた劇団四季が総力を挙げて“20世紀の悲劇を語り継ぐ”という使命を果たすべく完成させたミュージカルが『異国の丘』（01年）（『シネマ1』98頁）。東京でこれを観た私は、言いようのない感動に浸ったが、それは、涙があふれて止まらない美しくも悲しいメロディの数々と、よく練り上げられた素晴らしい脚本のためだ。

日中戦争を土台にしたミュージカル『李香蘭』に続く骨太の新作ミュージカルである『異

『異国の丘』の主人公は九重秀隆。九重という姓からピンと来る人もいるだろうが、そう、彼はかつての日本の総理大臣、近衛文麿をモデルとした九重菊麿の御曹司だ。そんな主人公の「許されざる恋」のお相手になる愛玲は、なんと敵国中国の高官令嬢という設定だ。そして、そんな恋の行方とは別に、風雲急を告げる日中情勢の中、和平工作に携わった秀隆は逮捕され、そのまま招集、そして満州へ。そこから生まれてくるのが、吉田正作曲の「今日もくれゆく異国の丘に、友よつらから、せつなから・・・」の歌詞で有名な『異国の丘』だが、ラーゲリに収容された秀隆の運命は如何に？

そんな『異国の丘』の主人公、九重秀隆に対して、本作の主人公、山本幡男は一等兵に過ぎなかったが、妻子と別れた山本がラーゲリで過ごす環境は九重と同じように過酷だった。ロシア語が堪能な彼なら、それを活用して“いい目”をしようとするれば、きっとそれは可能だったはず。しかし、ラーゲリの中で彼が発揮したのは別の能力。すなわち、文字や俳句を教えること、さらには野球を楽しむことだった。眼鏡をかけたインテリ顔からわかる通り、彼は肉体的には頑強ではなかったはずだが、精神面、とりわけ、その前向きな楽観性においては、ずば抜けていたらしい、相沢光男軍曹（桐谷健太）からは「一等兵！」と呼ばれ、名前さえ呼んでもらえなかったにもかかわらず、抑留生活が長くなるにつれて、彼は仲間たちの心の支えのリーダーになっていったからすごい。

本作では、『異国の丘』VS 本作、九重秀隆 VS 山本幡男の比較もしっかりと！

■□■ 4人の戦友(?)たちとの人間模様に注目! ■□■

本作は一方で、私の大好きな美人女優、北川景子が、「必ず戻る」との夫との“約束”を信じ、希望を失わずにその帰国を待ち続ける姿が描かれるが、これはあくまでサブストーリー。メインストーリーは、8年間に及ぶラーゲリでの抑留生活における山本と4人の戦友(?)たちを中心とする人間模様になる。戦友と言っても一緒に戦った者同士ではないから、正確に言えば、単なる捕虜仲間。しかし、ソ連は日本人捕虜の効率的な管理のため、旧日本軍の組織体制をそのまま使っていたから、一等兵の山本に対して軍曹の相沢は上官だ。そんな上官から、「こら、一等兵！」と呼ばれた山本は、「私は一等兵じゃありません。山本です。名前があります。」とやったものだから、以降、相沢から睨まれ続けることに。

他方、戦場において目の前で友人を亡くし、恐怖に足がすくんで逃げ出したことから、自らを「卑怯者」と思い込むという心の傷を抱えている松田研三（松坂桃李）は同じ一等兵。また、足が不自由なため徴兵されなかったにもかかわらず、漁の最中にソ連兵に連行された新谷健雄（中島健人）は、教育を受けていなかったから、山本は読み書きを教える仲に。そのため、山本とこの2人の関係は良好だ。

それに対して、何とも微妙なのが、山本にロシア文学の素晴らしさを教え、彼の人間形成に大きな影響を与えた同郷の先輩である原幸彦（安田顕）との関係。心を閉ざしている原に対して、山本が親しく話しかけると、「俺は生き延びるためなら戦友だって売る！」「現にお前も・・・」と告白されたからアレ。本作は、過酷なラーゲリ的环境下で希望を持

って生き続けることがいかに困難なことであるかを、山本と戦友たちとの人間模様の中で、これでもか、これでもか、とばかりに浮かび上がらせていくので、それに注目！

①1952年4月28日には、サンフランシスコ講和条約の発効によって連合国による日本占領が終わり、日本は主権を回復、②1953年7月には朝鮮戦争の休戦協定が成立し、③政治の世界では「もはや戦後ではない！」とのフレーズが新聞紙上を賑わしたが、ソ連のラーゲリは？ソ連はいつまで日本人捕虜を囚人として過酷な労働に従事させるの？その法的根拠は一体ナニ？

日本との往復葉書のやり取りができるようになったのは1952年の夏。そして、ソ連からの抑留者引き揚げが再開されたのは1953年11月だ。そんな動きの中、山本たちラーゲリの戦友たちはダモイ（帰国）への期待で胸を膨らませていたが・・・。

■病魔との闘いは？戦友たちのストライキは？診察は？■

『戦争と人間』（70～73年）では、高橋英樹が演じた柘植大尉は壮絶な戦死を遂げたが、山本圭が演じた左翼学生はソ連の捕虜になったものの、マルクス、レーニン主義の知識が有効に効いたようで、生き延びることができた。それと同じように（？）、本作ではラーゲリの中で起きる“民主運動”の姿が興味深いので、それに注目！

それまでの、天皇陛下万歳！大日本帝国万歳！をやめて、ろくな知識はなくとも、にわか共産主義者になり、インターナショナルを歌い、共産主義の宣伝、思想教育を行えば、そんな捕虜をソ連は優遇してくれる。そんな現実を目の当たりにした旧大日本帝国陸軍の中には、180度“思想転向”する奴が次々と出てきたから、人間は怖い。すると、元々ロシア語に通じ、共産主義についての知識も十分持っている山本なら、その気になれば捕虜の中で優遇を受けることもできたはずだが、さて、山本は？ラーゲリ生活が長引く中、山本の喉は癌に蝕まれていたらしく、ついにある日、血を吐いてしまうことに。

本作ではそこから起きる、戦友たちの我が身、我が命を顧みない労働拒否のストライキに注目！彼らの要求はただ1つ。山本にまともな病院での診察を受けさせることだが、そんな要求が、あんな事態の中で貫徹できるの？本作におけるその展開はあなた自身の目でしっかり確認してもらいたいが、戦友たちのストライキの結果診察を受けることができ、清潔なベッドの上で横になっている山本の姿を見ると一安心・・・？いやいや、残念ながら、実は・・・。

■遺言は書面だけ？法律上はともかく、本作では口述も！■

戦後の日本国憲法では、「通信の秘密」が基本的人権の1つとして保障されているが、戦前はそれほどでもなかったし、ラーゲリの中ではそんな権利はまったくなし。そればかりか、ときどき実施された抜き打ち検査で書いたものが発見されれば、スパイ活動に使うものとみなされて没収されていたらしい。そのため、「必ず日本の家族の元へ届けるから、遺言書を書け。」と勧められた山本は、悪化する病状の中、懸命の想いで遺言を書いたが、万が一抜き打ち検査で没収されてしまえば元も子もない。そこで戦友たちがひねり出した方

策とは？

それは少し考えれば誰でもわかることだが、本作ラストの約30分間は、やっどダモイ（帰国）を果たした4人の戦友たちが一人ずつ山本家を訪れ、モジミや4人の子供たちに、山本の遺言を口述するクライマックスの展開になる。本作中盤の、苦難に満ちたラーゲリ生活を山本と共に過ごした戦友は、松田研三、新谷健雄、相沢光男、原幸彦の4人だが、本作ではその4人が①山本幡男の遺家族のもの達よ！②お母さま！③妻よ！④子供達へ。に分かれた4つの遺言の文章を、それぞれの記憶（暗記）に基づいて口述するので、それに注目！「遺言は書面によらなければならない」とされているが、それはあくまで法律上のこと。映画では口述による遺言も有効ということだし、人を感動させる遺言はそうそうないので、その内容にも注目したい。

その役割をなぜ1人とせず、4人で分担したのかも少し考えればすぐにわかることだが、それは本作の長いクライマックスを盛り上げる主要な要素にもなっている。もっとも、『キネマ旬報1月上・下旬合併号』の「REVIEW 日本映画&外国映画」における井上淳一氏の採点は星2つ。そのうえ「遺言のくだり長すぎるって」と、手厳しい。瀬々敬久監督がこれに対してどう反論するかは聞きたいところだが、「なんちゃって描写の連続。日本映画の限界か。なら、日本映画は本当にクソ。」のコメントをどう聞けばいいの？

ちなみに、本作での北川景子の出番は少ししかないが、私の目には『真夏のオリオン』（09年）（『シネマ22』253頁）における彼女の敬礼のシーンが目に焼き付いている。それと同じように、本作でも彼女の美しさが際立っているので、出番は少ないがそれにも注目！

2022（令和4）年12月28日記